

(19)日本国特許庁 (J P)

## (12) 公開特許公報 (A)

(11)特許出願公開番号

特開2003-38869

(P2003-38869A)

(43)公開日 平成15年2月12日(2003.2.12)

(51)Int.Cl.<sup>7</sup>

B 26 B 13/20

識別記号

F I

B 26 B 13/20

テマコト<sup>\*</sup>(参考)

3C065

審査請求 有 請求項の数 7 O L (全 11 頁)

(21)出願番号

特願2001-233262(P2001-233262)

(22)出願日

平成13年8月1日(2001.8.1)

(71)出願人 390038209

足立工業株式会社

岐阜県関市広見489番地の1

(72)発明者 足立 栄美

岐阜県関市広見489番地の1

(74)代理人 100083932

弁理士 廣江 武典

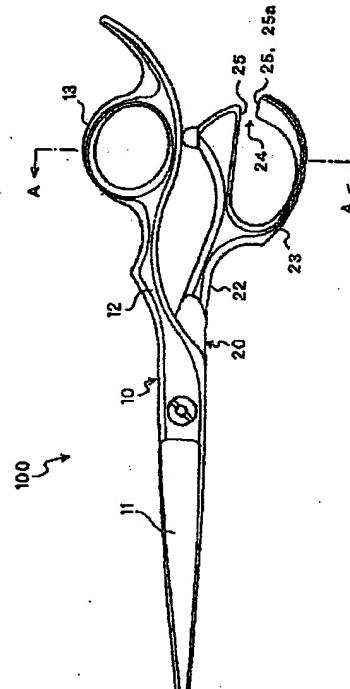
F ターム(参考) 3C065 AA04 AA06 AA15 AA21 FA02

(54)【発明の名称】 指環と柄部が屈曲可能な鉄

(57)【要約】

【課題】 鉄に指環の大きさ、形状、指環の向きなどを所望の大きさ、形状、向きに屈曲変形可能にすることにより、鉄の使い手の指の太さ・長さ、その他、各使い手の持ち方に適し、手や指にフィットして使いやすい鉄に変形させることのできる鉄を提供することにある。或いは刃体の柄部を所望形状に屈曲変形させて、各使い手の使いやすい鉄に変形させることのできる鉄の提供。

【解決手段】 指環23を、この指環23の任意な箇所で環を切る状態にする切断部24を有し、且つ指環23を所望形状に屈曲して塑性変形させることが可能な程度の軟らかさを有する様に形成した。或いは、柄部22を、所望形状に屈曲して塑性変形させることが可能な程度の軟らかさを有するように形成した。



## 【特許請求の範囲】

【請求項1】 2本の刃体を枢着してなる鉄であって、前記刃体は刃部と柄部と指環とを有し、

前記指環は、この指環の任意な箇所で環を切る状態にする切断部を有し、且つ前記指環を所望形状に屈曲して塑性変形させることができ程度の軟らかさを有する様に形成されたことを特徴とする鉄。

【請求項2】 2本の刃体を枢着してなる鉄であって、前記刃体は刃部と柄部と指環とを有し、

前記柄部は、所望形状に屈曲して塑性変形させることができ程度の軟らかさを有する様に形成されたことを特徴とする鉄。

【請求項3】 2本の刃体を枢着してなる鉄であって、前記刃体は刃部と柄部と指環とを有し、

前記指環は、この指環の円周上の任意な箇所で環を切る状態にする切断部を有し、且つ指環を所望形状に屈曲変形させることができ程度の可塑性を有する様に形成され、

更に前記柄部は、所望形状に屈曲して塑性変形させることができ程度の軟らかさを有する様に形成されたことを特徴とする鉄。

【請求項4】 切断部は、

対峙する切断端部同士の間隔が、指環を屈曲させて前記間隔を狭めるための狭め代を有するように形成されたことを特徴とする請求項1又は3記載の鉄。

【請求項5】 切断部は、対峙する切断端部の対峙面側が凹凸形状に形成されると共に、

前記凹凸形状は、対峙する凹形状と凸形状が噛み合うように、且つ、凹凸形状が指環内側面に現れる配置で形成されたことを特徴とする請求項1、3、4のいずれか記載の鉄。

【請求項6】 切断部は、切断端部同士が所定間隔に離されて形成されると共に、前記切断端部同士を繋いで指環の一部を成す繫ぎ部材を備え、

前記繫ぎ部材は、前記指環を所望形状に屈曲した場合にこの屈曲に伴う切断端部同士の位置関係変化に追従可能に形成されたことを特徴とする請求項1、3、4のいずれか記載の鉄。

【請求項7】 切断部を備えた指環が、記憶合金によりなることを特徴とする請求項1、2~6のいずれかに記載の鉄。

## 【発明の詳細な説明】

## 【0001】

【発明の属する技術分野】 この発明は、刃部と柄部と指環とを有す刃体の2本を枢着してなる鉄の改良に関し、詳しくは、前記指環の大きさ、形状、指環の向きなどを所望の大きさ、形状、向きに屈曲変形可能にすることにより、当該鉄の利用者の指の太さや長さ、その他、各使い手の持ち方に適し、手や指にフィットして使いやすい鉄に変形させることのできる鉄に関する。或いは刃体の

柄部を所望形状に屈曲変形させて、各使い手の使いやすい鉄に変形させることのできる鉄に関する。

## 【0002】

【従来の技術と発明が解決しようとする課題】 理容鉄200は、図20に示す様に2本の刃体210、220を枢着させたものであり、刃体210、220は刃部211、221と柄部212、222と指環213、223とを有し、2つの指環213、223が鉄を持つ箇所となる。具体的には、図21に示す様に動刃側となる刃体220(以下、「動刃体220」という)の指環223に親指を通し、静刃側となる刃体210(以下、「静刃体210」という)の指環213に中指を通して鉄200を持つのである。また人差し指は静刃の柄にのせ、薬指は指環に設けられた指掛けにのせて鉄を操作する。

【0003】 しかし手の大きさや、指の太さ、長さは鉄の使い手ごとに異なるものであるため、各自にあった大きさや形状の指環であることが望ましい。

【0004】 また指環は、その指環に指を通したときに、指環と指との間に遊びが余りできないように、比較的小さな指環にしてある。また指環の向きは、2つの指環213、223が図23に示す様に平行になっている。(なお図22は指環213、223を示す略図であり、図に示す様な指環213、223の面Saに対する垂直線L方向を、本願では「指環の向き」という。)

【0005】 しかし鉄を握る時、指環213、223の向きLと指環213、223に挿した指の方向Mとは図24に示す様に異なる方向となるので、指環213、223の向きLを図25に示す様に、指の挿す方向Mに近づけたものが望ましい。即ち指環213、223は図26に示す様な向き、換言すれば、図26中で、指環213、223の面Saを、鉄の開閉軌跡面Sb(開閉操作される鉄の刃体の軌跡Rにより規定される面)と、図26に示す様な角度関係にするのがよい。

【0006】 また鉄の持ち方は、図21に示した様に、鉄200の長手方向Pと鉄を持つ手(特に腕の向き)とが比較的直角に近い角度になる持ち方があり、例えば髪を図27に示す様に切断する場合にはこの様な持ち方をする。ただその他にも、図28に示す様に、鉄200の長手方向Pが手の方向とほぼ同じ方向となる持ち方がある。この持ち方は、例えばスライディング・カットと呼ばれる切り方をする時などに用いられる方法である。スライディング・カットとは、鉄で髪を切る時に図28の矢印方向Pに示す方向に動かしながら切る切り方である。つまり鉄の先端方向に鉄を滑らす様に動かしながら閉じるのである。この様な滑らし方を、図29に示す2点鎖線上に沿って行うと、切った髪の長さの不揃いがヘア・デザイン的に優れ、好まれるカット方法の主流の1つになっている。ただこの持ち方は、図28に示した様に、鉄の長手方向Pと手の方向とをほぼ同じ方向とするので、手首から先を比較的無理な姿勢に曲げることと

なる。そのため図30に示す様に、親指を通す指環223の向きを曲げて、手首から先も、手の方向と同じ方向になる様にした鉄も提供されている。この鉄200であれば、手首から先も自然な姿勢になるので、作業も楽に行えるのである。この鉄は、指環223が、刃体の長手に対して図31に示す様な折れた向きの角度関係になっている(図31の図と異なり、動刃体の指環223が図の上となる様に記載してある)。

【0007】しかしこれら指環の向き・角度も、各自の握り方や、鉄の動かし方にあったものであることが望ましい。

【0008】また以上とは異なる鉄の技術として、図32に示す様に、指環313, 323を偏在させた鉄300が提供されている。一般に、鉄の指環213, 223は、図20に示した様に、鉄200の長手中心線Kのほぼ両側に位置するように形成されている。これに対し、図32に示した鉄300は、柄部312, 322の角度を違えて、中心線Kに対して偏った位置に指環313, 323を配置したものである。このような鉄300は、図32に示した様に何らかの対象物Qに沿って鉄を動かすときに、指環がその対象物Qに当たるなどしないよう考慮されたものである。例えば、理容鉄であれば、頭皮に沿わせるように鉄を動かす場合には、開閉操作される鉄の指環が、頭や髪に邪魔されることが無い利点がある。しかしこの様な鉄であっても、柄部の角度や、指環の偏在の程度は、鉄の使い手ごとに好みが異なり、従って、各自で好みの偏在程度などに調整できると具合がいい。

【0009】以上の問題を鑑み、本願発明の目的とするところは、鉄に指環の大きさ、形状、指環の向きなどを所望の大きさ、形状、向きに屈曲変形可能にすることにより、鉄の使い手の指の太さ・長さ、その他、各使い手の持ち方に適し、手や指にフィットして使いやすい鉄に変形させることのできる鉄を提供することにある。或いは刃体の柄部を所望形状に屈曲変形させて、各使い手の使いやすい鉄に変形させることのできる鉄を提供することにある。

#### 【0010】

【課題を解決するための手段】以上の課題を解決するための手段を、実施例の図1を用いて説明すると、2本の刃体10, 20を枢着してなる鉄100であって、刃体10, 10は、刃部11, 21と柄部12, 22と指環13, 23とを有する鉄100に関し、本願請求項1記載の発明においては、指環23が、この指環23の任意な箇所で環を切る状態にする切断部24を有し、且つ指環23を所望形状に屈曲して塑性変形させることが可能な程度の軟らかさを有する様に形成されたことを特徴としている。切断部は、2つの指環13, 23のいずれかの一方に設けてもよく、両方に設けてよい。手の力で屈曲させることができる軟らかさは、指環の肉厚を薄く

形成して屈曲させやすくしてもよく、指環に用いる材質を軟らかいものとしてもよい。刃体は一般にステンレス鋼で形成されるが、このステンレス鋼のカーボンの含有率を低くすることにより、指環に材料を軟らかいものにしてよい。或いは、肉厚の薄さと材料に軟らかいものを用いることを併用したものでもよい。ただ鉄を通常の使用方法にて使用する限りにおいては、指環が変形することのない程度の強度は保つものとする。以上の様に、鉄の指環に切断部を有する様にしたことにより、切断端部25, 25同士の間隔を拡げができる。また、指環の向きを変えたりすることが容易になる。特に切断端部は自由端となっているため、この自由端たる切断端部に応力を加えて屈曲させることは、切断部を有しない従来の指環に応力を加える場合よりは遙かに屈曲させやすく、また屈曲させて得られる所望形状も変化に富んだ様々な形状が可能となり、その分、鉄の使用者の手と指にフィットさせ易くなる。

【0011】請求項2記載の発明を、実施例の図1を用いて説明すると、柄部12, 22が、手の力で前記柄部20を所望形状に屈曲して塑性変形させることができ程度の軟らかさを有するように形成されたことを特徴としている。柄部12, 22は、請求項1記載に係る指環と同様に、肉厚を薄くしたり、材質に軟らかいものを用いたりすることにより実現できる。ただ鉄を通常の使用方法にて使用する限りにおいては、柄部12, 22が変形することのない程度の強度は保つものとする。これにより、柄部を所望の形状に変形させることができ、鉄の使い手の好みに合わせることが容易になる。

【0012】請求項3記載の発明は、指環が、この指環の円周上の任意な箇所で環を切る状態にする切断部を有し、且つ手の力で指環を所望形状に屈曲変形させることができ程度の可塑性を有する様に形成され、更に柄部は、手の力で柄部を所望形状に屈曲して塑性変形させることができ程度の軟らかさを有するように形成されたことを特徴とした。指環や柄部に必要な軟らかさは、請求項1及び2について述べた手段と同様であり、鉄を握る時も、鉄を開閉操作するときも、使用者の手と指にフィットさせ易く、使用者の好みに合わせることが容易になる。

【0013】請求項4記載の発明では、切断部は、対峙する切断端部同士の間隔が、指環を屈曲させて間隔を狭めるための狭め代を有するように形成されたこと特徴とした。これにより、指環は穴を大きくするだけではなく、小さくすることも可能となり、指の細い人であっても手と指にフィットさせ易くなる。

【0014】請求項5記載の発明を、実施例の図11～13を用いて説明するが、この発明は、切断部4は、対峙する切断端部5, 5の対峙面側が凹凸形状に形成されると共に、凹凸形状は、対峙する凹形状6と凸形状7が噛み合うように、且つ、凹凸形状が指環内側面に現れる

配置で形成されたことを特徴とした。つまり図1～10に示す様な切断部であれば、切断部に指が挟まる感じが生じて、或いは環の切れ目が指の皮膚の引っかかりが生じて、作業中においてはこの指の感覚が不快感などとなって何らかの障害となるが、本請求項5によれば、凸形状7が相手の凹形状6に噛み合っているので、切断部の不連続を、指の感触の面では切れ目のない連続した指環の様に感じさせることができる。

【0015】請求項6記載の発明を、実施例の図14～15を用いて説明するが、この発明は、切断部14が、切断端部15、15同士が所定間隔に離されて形成されると共に、切断端部15、15同士を繋いで指環の一部を成す繋ぎ部材30を備え、繋ぎ部材30は、指環13を所望形状に屈曲した場合にこの屈曲に伴う切断端部15、15同士の位置関係変化に追従可能に形成されたことを特徴とする。請求項5と同様に、指環に切断部24が存在することによる、切断部24に指が挟まる様な感じを無くすため、また切断部への指の引っかかりを無くすためである。繋ぎ部材は、切断端部同士の位置関係変化に追従可能であるが、これは繋ぎ部材を弾性体で形成する方法があるが、これに限らずどの様であってもよい。繋ぎ部材は切断端部との間に結合部を有して着脱可能に設けてもよいし、着脱不能に設けてもよい。切断端部同士の所定間隔とは、この様な繋ぎ部材の着脱が可能な為の間隔ものを要件としている。また繋ぎ部材が弾性体であれば、その可能な伸縮範囲・曲曲範囲は、繋ぎ部材のある程度の長さを必要とし、よって所定間隔とはこの様な長さに繋ぎ部材がはまる間隔であることをも要件としている。弾性体でない他の材質・方法で繋ぎ部材を実現するなら、その実現に必要な間隔をいう。

【0016】請求項7記載の発明は、切断部を備えた指環が、記憶合金によりなることを特徴とする。これにより、様々な形状に屈曲した指環を、当初の形状に回復させることができる。

### 【0017】

【発明の実施の形態】次に、本願発明の実施例を説明する。

(実施例1) ; 図1に示す鉄100は、ステンレス鋼による静刃体10と動刃体20との2本を枢着してなる理容鉄である。各刃体10、20は刃部11、21と柄部12、22と指環113、23とを有し、動刃体20の指環23が、動刃体20の柄尻に位置する箇所で環を切る状態にする切断部24を有している。且つこの指環23に用いられているステンレス鋼にはカーボンの含有率を低くして軟らかくしたステンレス鋼が用いられ、しかも指環は肉薄に形成されている。そのため、器具などを使わずに、手の力で直接に、この指環や特に切断端部を所望形状に屈曲して塑性変形させることができ程度の軟らかさを有する様に形成されている。ただ鉄を開閉操作など通常の使用をする限りにおいては、指環が変形す

ることのない程度の強度は保つものとする。なお、実際にはペンチやこれに類似した器具を用い、またペンチなどの把持痕を指環に付けない様に布などを介して把持し、屈曲させるなどしても良い。軟らかさは様々に設けることができ、素手で屈曲できるもの、素手では多少困難でも手近な棒や板を用いて屈曲できるもの、指環の屈曲用の専用工具を開発・準備し、これを用いた屈曲により指環の形状チューニングを専門的に行うものなど、色々な軟らかさの鉄を提供しても良い。

10 【0018】これにより、切断端部25、25同士の間隔を拡げたり、指環23、13の向きを変えたりすることが容易になり、鉄の使用者の手と指にフィットさせ易くなる。また切断部24は、対峙する切断端部25、25同士の間隔をある程度広く探ってあり、指環23を屈曲させてこの間隔を狭めるための狭め代となるように形成されている。これにより、指環23は穴を大きくするだけではなく、小さくすることも可能となり、指の細い人であっても手と指にフィットさせ易くなる。

【0019】また切断部24は、その端部の一方25aが図2～4のXに示す様な屈曲を最初から形成してあり、スライディング・カットなど図24に示したと同じ持ち方をする際には、図5に示す様に、持つ手の手首から先が比較的延ばした状態の自然な持ち方をすることができる。しかし最初から形成してある屈曲が、使い手の好みと異なるのであれば、この端部を手で好みの状態に屈曲させ、指環をより使い良い向き・角度に調整することができる。

【0020】また指環に設ける切断部は、どのような箇所であってもよく、動刃体20の指環23であれば、図30 1に示した箇所の他に、図6、或いは図7に示す箇所24であってもよい。その他指環円周上のどの箇所であってもよい。静刃体10の指環13であれば、図8～10に示すそれぞれの箇所14であってよい。また切断部は静刃体と動刃体のいずれか一方に設けても、双方に設けてもよい。

【0021】(実施例2) ; また切断部4は、以上に示した単純な形状に限らず、図11～13に示す様な切断部4であってもよい。即ちこの切断部4は、対峙する切断端部5、5の対峙面側が凹凸形状としての段部に形成されると共に、この凹凸形状としての段部は、対峙する凹形状6と凸形状7が噛み合うように形成されている。且つ、図12の矢印Y方向から見た切断部4は、図13に示す様に、指環内側面に凹凸形状が現れる配置で凹凸形状が形成されている。つまり実施例1に示した様な切断部24であれば、切断部24に指が挟まる様な感じが生じたり、或いは切断部への指の引っかかりが生じて、作業中においてはこの指の感覚が不快感などとなって何らかの障害となり得る。しかし本実施例の切断部4によれば、凸形状7が相手の凹形状6に噛み合っているので、切断部4の不連続を、指の感触の面では切れ目のな

い連続した指環の様に感じさせることができる。この様な切断部4も、実施例1同様に、指環13、23の円周上のいずれに設けてもよく、図1~10に示した切断部を図11~13に示した様な凹凸形状にしたものであつてもよい。

【0022】(実施例3) ; この実施例3も実施例2と同様に、指環に切断部24が存在することによる、切断部24に指が挟まる様な感じを無くすため、また切断部への指の引っかかりを無くすための請求項6の実施例としての鉄100である。図14は指環の図であり、この指環の切断部14は、図15に示す様に切断端部15、15同士の間隔が実施例1~2よりも広い間に離されて形成されている。そして、切断端部15、15同士の間には、この切断端部15、15同士を繋いで指環の一部を成すバネ材30aが繫ぎ部材30として備えられている。切断端部15には図15に示す様に、雄ネジによる結合部18が凸設されており、切断端部15の断面とほぼ同じ太さのバネ材30が、雄ネジに繫ぎ部材30として螺号される様になっている。この指環13は、指環13を所望形状に屈曲して、この屈曲に伴う切断端部15、15同士の位置関係が様々に変化しても、繫ぎ部材30のバネ材による弾性体であるために、この位置関係変化に応じて伸縮したり、湾曲したりすることができる。つまり繫ぎ部材30としてのバネ材30aは、指環の屈曲に伴う切断端部同士の位置関係変化に追従可能に形成されている。指環13を屈曲させるときには、バネ材30aが切断部14に備えられたまま屈曲してもよく、いったん雄ネジの接合部18からバネ材30aを外してから屈曲させ、その後に再度、バネ材30を螺号して取り付けても良い。なお請求項6にいう切断端部15、15同士の所定間隔とは、この様なバネ材30aの着脱が可能な為の間隔ものを要件としている。また繫ぎ部材の可能な伸縮範囲・枠曲範囲は、繫ぎ部材のある程度の長さを必要とし、よって所定間隔とはこの様な長さに繫ぎ部材がはまる間隔であることをも要件としている。この実施例の鉄100は図16に示す様に、外見上、指環13が切れていない様に見え、切断部14の切れ目に指が挟まる様な感じも、また指の引っかかりもなく、鉄の良好な開閉操作ができる。なお開閉操作の時は、指環13に通した指で指環自身に力を加えるが、力の加わる場所がバネ材30aの箇所であっても、この力によっては伸びたり、曲がったりしない程度の剛性をバネ材が有している。

【0023】(実施例4) ; この実施例4は、実施例3と同様に、切断部14が繫ぎ部材を備えた鉄の例である。切断端部15、15には、図17~19に示す様に中空円柱状のゴム材31aによる繫ぎ部材31が備えている。切断端部15、15には、ゴム材31a端部の開口部31bが嵌入される結合部18が、周面に抜け止め部18aが形成された円柱台形の突起として形成されて

いる。ゴム材31aの持つ弾性により、指環13を屈曲させた際には、切断端部15、15同士の位置関係変化に追従可能である。この繫ぎ部材31は表面が滑らかであるために、指環に指を通して、触れた感触が良好であり、カラーゴムを用いればデザイン上のアクセントにもなる。切断部14の間隔を拡げた際に、ゴム材がこの拡がりに追従しきれない場合を考慮して、長めのゴム材を予備に準備しておき、自分の手にあった形状に指環を屈曲させてから、ひらいた切断端部同士の間隔に合った長さにゴム材を切り出し、これを繫ぎ部材としてはめればよい。

【0024】なお、繫ぎ部材は着脱自在に設けてもよいが、切断部に固定して着脱不能に設けてもよい。また繫ぎ部材の、切断端部同士の関係変化への追従可能は、繫ぎ部材を弾性体で実現したものでもよいが、これに限らない。例えば塑性変形容易な丸棒材を端部断面の太さで形成し、繫ぎ材の湾曲はこの塑性により実現してもよい。また繫ぎ材に必要な伸縮に相当する機能については、例えば繫ぎ材の端部を収納できる収納孔を切断端部に形成しておき、しかも深い孔に形成しておくことにより、この孔の太さに形成してある繫ぎ部材端部を収納孔に出し入れして切断端部の間隔変化に追従させるのでもよく、その他、どのような手段により繫ぎ部材の追従可能を実現してもよい。

#### 【0025】

【発明の効果】以上、述べたように、本願発明の鉄によれば、鉄をその鉄の使い手の持ち易いように屈曲変形させることができるので、各個人の手や指の大きさ、形状、或いは握り癖にあわしたオーダーメイド的な鉄を得ることができる。特に、請求項1記載の発明によれば、指環の任意な箇所に切断部を有し、且つ指環には手の力でこの指環を所望形状に屈曲できるようにしたので、指環の環を拡げて大きくすることができ、或いは指環の形状を変形させることができ、或いは図2に例示した様に指環の向きなどを変えることができ、鉄の使用者の手と指にフィットさせ易くなる。

【0026】請求項2記載の発明は、柄部を手の力で所望形状に屈曲できるようにしたので、図114に示した様に指環を偏在させることが可能となり、その他刃体と指環との位置関係を好みの位置関係に変えることが可能となり、使い手の創意工夫に応じた好みの鉄にすることができる。

【0027】特に、請求項3記載の発明では、上記請求項1~2の特徴を併せ持つようにしたので、鉄を握る時の持ち易さにおいても、鉄を開閉操作するときの操作のし易さにおいても、使用者の手と指にフィットさせ易く、使用者の好みに合わせることが容易になる。

【0028】請求項4記載の発明では、切断部は、対峙する切断端部同士の間隔を狭めるための狭め代を有するように形成されたこと特徴とした。これにより、指環は

環を大きくするだけではなく、小さくすることも可能となり、指の細い人であっても手と指にフィットさせ易くなる。

【0029】請求項5記載の発明では、切断部は、対峙する切断端部の凹凸形状が、そり対峙する凹形状と凸形状が噛み合うように、その際には、凹凸形状が指環内側面に現れる配置で形成した。これにより切断部による不連続を、指の感触の面では切れ目のない連続した指環の様に感じさせることができる。請求項6記載の発明も切断部の切れ目による不具合を解消している。

【0030】請求項7記載の発明によれば、屈曲させる前の形状を復元させることができるので、屈曲し間違えて変な形状になってしまった場合などは、もう一度元の形状に復元させて、再度の屈曲作業を行うことができる。

#### 【図面の簡単な説明】

【図1】この図は、実施例1に示した鉄の正面図である。

【図2】この図は、図1に示した鉄の底面図である。

【図3】この図は、図1に示した鉄の右側面図である。

【図4】この図は、図1に示した鉄のA-A断面図である。

【図5】この図は、図1に示した鉄をスライディング・カット用の持ち方で持った様子の説明図である。

【図6】この図は、動刃体の指環における切断部を、図1~5の鉄とは別の位置にした例の図である。

【図7】この図は、切断部を更に別の位置にした例の図である。

【図8】この図は、静刃体の指環における切断部の位置の例を示した図である。

【図9】この図は、切断部を別の位置にした例の図である。

【図10】この図は、切断部を更に別の位置にした例の図である。

【図11】この図は、実施例2に示した切断部の説明図である。

【図12】この図は、図11の切断部の正面の図である。

【図13】この図は、図11の切断部を指環の中から見た様子の図である。

【図14】この図は、実施例3の鉄の指環を説明する図である。

【図15】この図は、図14における繋ぎ部材のバネ材を省略した図である。

【図16】この図は、実施例3の鉄の図である。

【図17】この図は、実施例4の鉄の指環を説明する図である。

【図18】この図は、図17における繋ぎ部材のゴム材を省略した図である。

【図19】この図も、実施例4の鉄の図である。

【図20】この図は、従来の鉄の正面図である。

【図21】この図は、鉄を持った時の指の位置の説明と、手と鉄とが直角に近い角度関係となること説明とをする図である。

【図22】この図は、指環を示す略図であり、発明の詳細な説明で用いている言葉の意味を明確にするための説明をしている。

【図23】この図は、鉄と指環との向き関係を説明する図である。

【図24】この図は、指環と指との向き関係を説明する図である。

【図25】この図も、指環と指との向き関係を説明する図である。

【図26】この図は、鉄と指環との向き関係を説明する図であり、図25に示した指環と鉄との向き関係を略示している。

【図27】この図は、髪を切断する際の切り方を説明する図である。

【図28】この図は、スライディング・カットをするときの鉄の持ち方を説明する図であり、鉄を持った時の手と鉄とが、比較的同じ方向となることを説明している。

【図29】この図は、スライディング・カットと呼ばれるカット技術で髪を切断する際の切り方を説明する図である。

【図30】この図は、図28と同様にスライディング・カット用の持ち方をした図であるが、動刃体の指環の向きによって、鉄を持った手が図28よりは自然な姿勢となることを説明している。

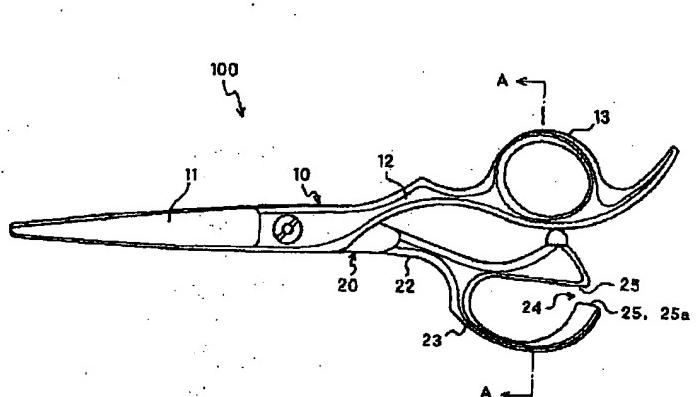
【図31】この図は、鉄と指環との向き関係を説明する図であり、図30に示した指環と鉄との向き関係を略示している。

【図32】この図は、従来の鉄の例を示す図であり、指環が鉄の中心線Kに対して偏在している様子を示している。

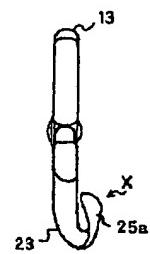
#### 【符号の説明】

100	鉄
10	静刃対
20	動刃体
11, 21	刃部
12, 22	柄部
13, 23	指環
14, 24, 4	切断部
15, 25, 5	切断端部
18	接合部
6	凹形状
7	凸形状
30, 31	繋ぎ部材

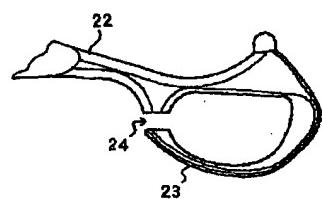
【図1】



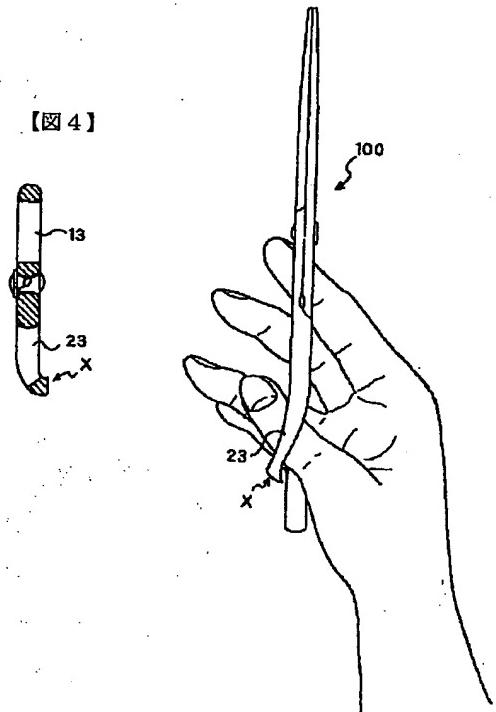
【図3】



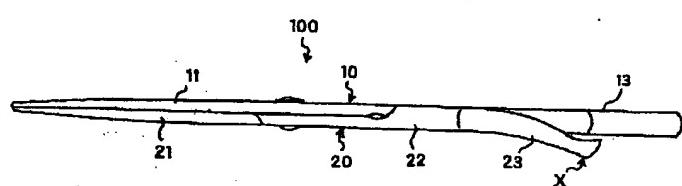
【図6】



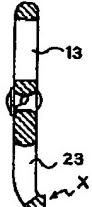
【図5】



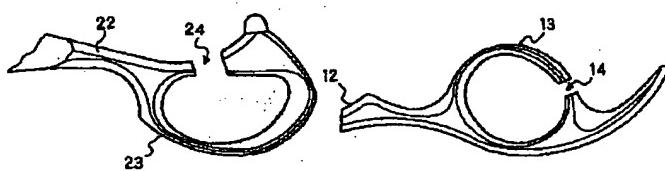
【図2】



【図4】



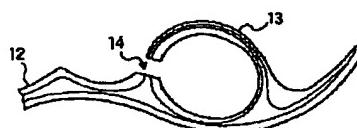
【図7】



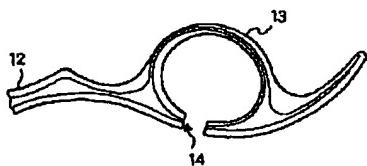
【図8】



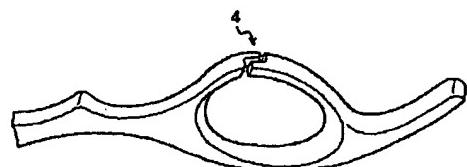
【図9】



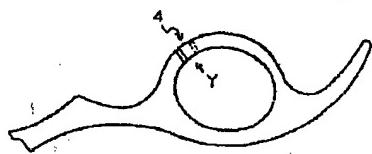
【図10】



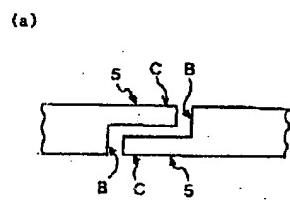
【図11】



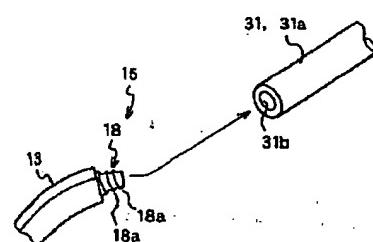
【図12】



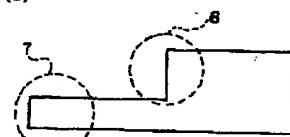
【図13】



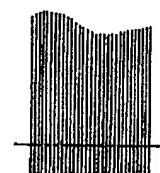
【図18】



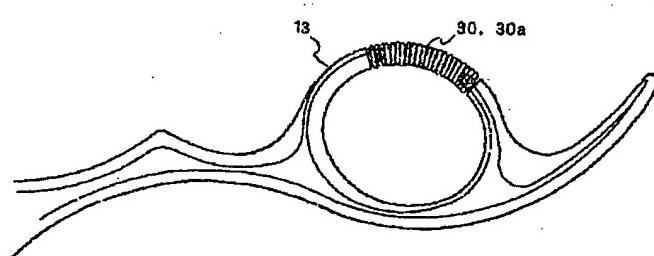
(b)



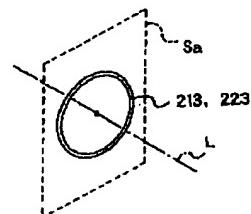
【図27】



【図14】



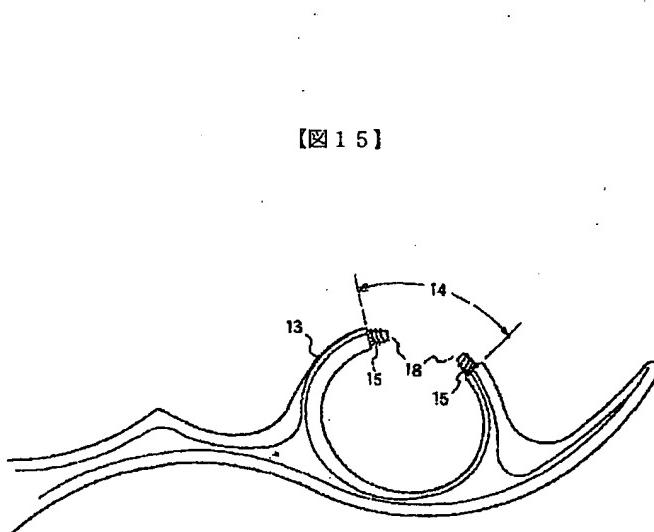
【図22】



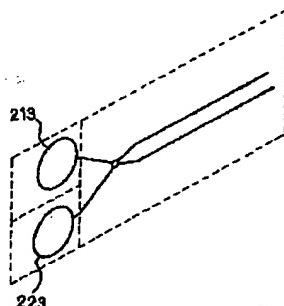
【図29】



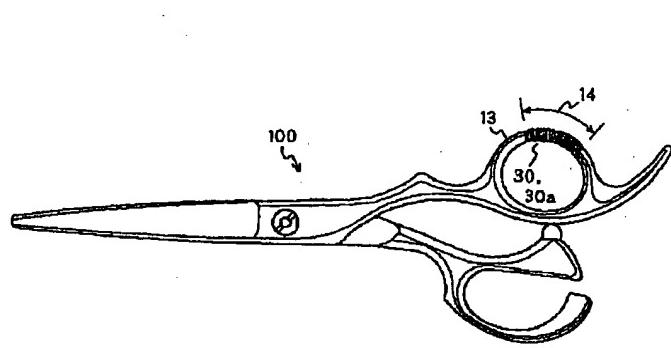
【図23】



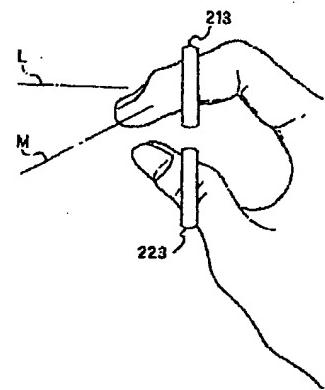
【図15】



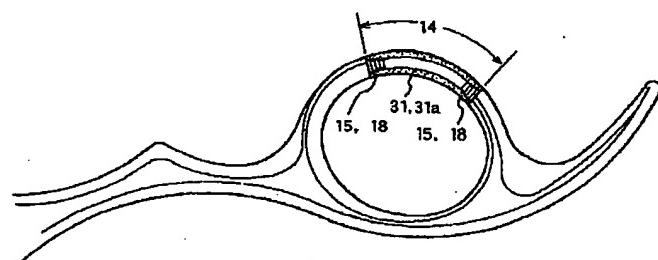
【図16】



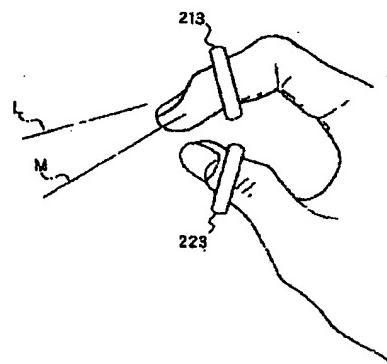
【図24】



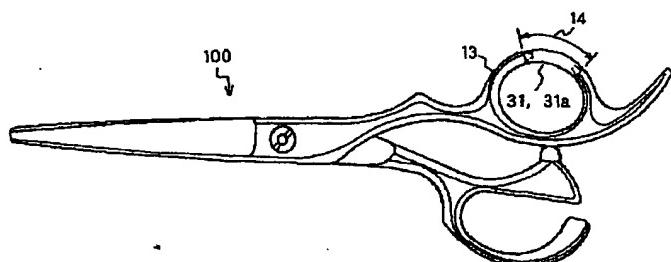
【図17】



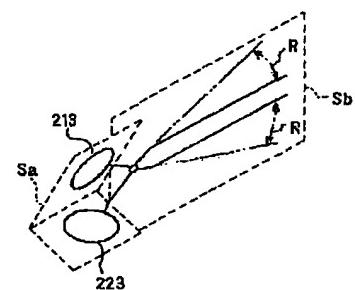
【図25】



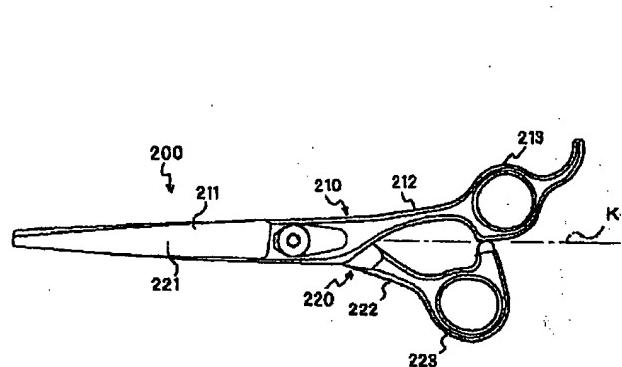
【図19】



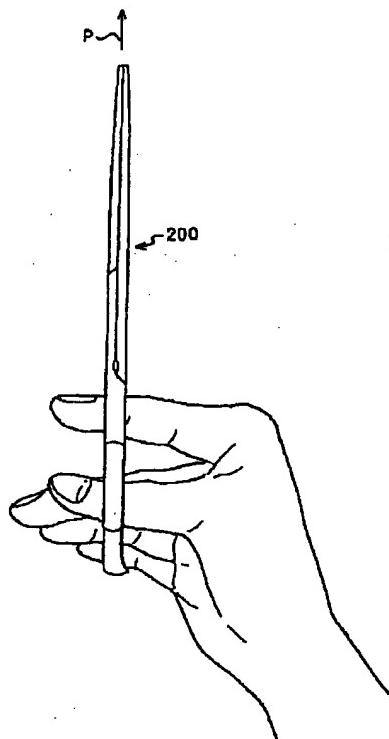
【図26】



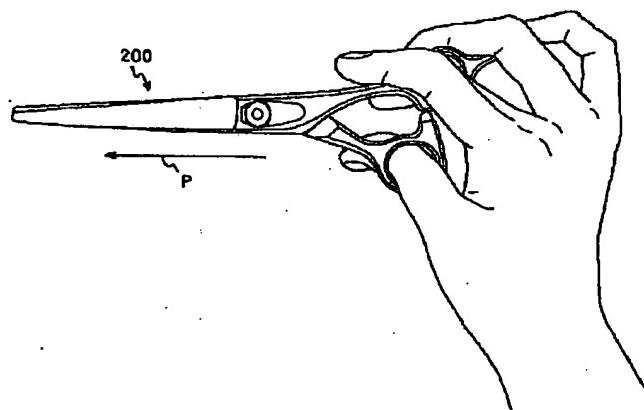
【図20】



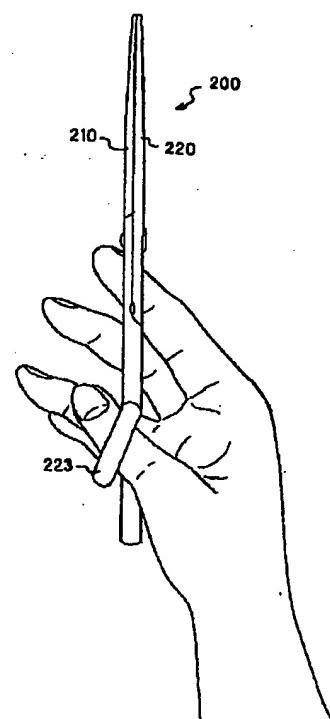
【図28】



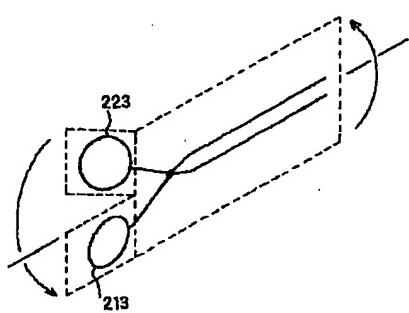
【図21】



【図30】



【図31】



【図32】

